

奥平富士子 告別式 二〇一三年四月二十一日

聖書 詩編 23 讚美歌 312 405

祈 禱

天にいます私どもの父なる神様 あなたは万物の創造者にいまし、世界の歴史を支配されるとともに、私ども小さき者ひとりひとりの生と死を幸つてい給うことを、畏れをもって信じ感謝いたします。

父なる神様 あなたは奥平富士子にいのちを与えて、百年に余る長い生涯を祝福し、ここにその深い聖旨によつて彼女を御許にお召しになりました。

奥平富士子はその若き日に神を畏れることを知り、イエス・キリストの十字架の贖いによつて罪を許され、キリストの復活に与つて限りない生命に恵まれました。彼女はこの絶大な恵みに対する心からの感謝と、主イエス・キリストに対する忠実な信仰をもつて、あなたの定められた道を歩み通しました。いまや父なる神のふところに抱かれて、「死も悲しみも嘆きも労苦もない」（黙示録 21・4）天の休息に入れられたことを信じ、彼女の靈魂をあなたの御手に委ねます。私どもは心からの感謝をもつて奥平富士子に告別し、喜びをもつて彼女をあなたの許に送ります。

しかしながら、この地上に遺された者はなお朽ちるものをまとつて、深い悲しみの中にあります。慈愛と慰めの父なる神様 どうぞご遺族一同の上に、そして奥平富士子に愛され、彼女を愛してここに集っているすべての者の上に、あなたの御慰めを豊かにお与え下さいますように切に祈ります。

天の父なる神様 どうぞこの時に当って、「地に落ちた一粒の麦」（ヨハネ伝 12・24）である奥平富士子の

生涯に習い、私どもひとりひとりもそれぞれの来るべき終わりの日を思つて、厳肅に各自の「生涯の日を正しく数える」(詩編90・12)ことができましますように、お導き下さい。この告別式を通して、イエス・キリストの福音が告知され、出席者一同が神の祝福に与り、神の聖名が崇められる折として下さいますように、私どもの救い主イエス・キリストの御名を通してお祈り申しあげます。

式 辞

奥平富士子さんは、先週十八日その日になつたばかりの深夜に急逝されました。お誕生が一九〇九年(明治四二)年十一月二十六日ということですから、満百三歳と五か月になる長寿のご一生でした。骨折によるご入院中でありましたが、伺うところによれば、さしたるお苦しみもなく、ひとり静かに召されていかれたということですから。いかにも奥平さんらしいと感嘆久しくしましたが、これは長寿社会の現代でも決して多いとは言えない「自然死」、昔なら「大往生」と言うべき甚だ恵まれた、尊敬すべき死にようであつたと存じます。しかも、彼女は身体的にこそこの半年間ほど介護を受けられましたが、その意識も、思考も、判断もさいごまでしっかりとしておられました。

ところで、一般に長生きになつたからでしょう、人は「よく」死にたいと願うようになりました。余り苦しむことなくとか、ボケないうちにとか、他(はた)に迷惑をかけずにとか、と。そして、些か教訓的には「よく死ぬためには、よく生きなければならぬ」などと申します。

そうであれば、奥平さんは正に「よく」生きた方でした。当時(昭和の初めころでしょうか)、地方の子女にとつては決して普通ではなかつた、師範学校で学んで小学校の教諭となり、生涯児童の学校教育に力を尽くされました。私は彼女の教え子の母親を通して彼女に出会った人間ですが、奥平さんは多くの子供たちに彼女

の人格的感化を及ぼしたばかりでなく、彼らを通して広く彼らの親御さんたちとも豊かな人間的交流を重ね、それが子供たちの卒業後も長く続いたという実例を、いくつも聞き及んでいます。

こうした人間的交流は、実は彼女のキリスト信仰に基づくものでありました。キリストは「隣人を自分のように愛しなさい。敵を愛しなさい」(マタイ 22・39、5・44)と教えた方ですが、またご自分の弟子たちを「あなたがたを友と呼ぶ」(ヨハネ 15・15)とも言われました。先程ご一緒に歌った³¹番の讚美歌は、私どもが救い主と仰ぐイエス・キリストは私どもの「いつくしみ深き友」にいますということを感じ、その喜びを歌ったものです。奥平さんもまたイエスが自分の信仰の友となって下さった、自分にとってイエスこそ本当の友であるという信仰を強く抱いておられ、それで誰とも「友・友人」として親しくつき合われたのでした。「友」とは、人間として自他全く同等に相對している、そういう関係にある人のことです。彼女がいわゆるつき合いのいい人であったとは思いませんが、誰に対してもひとりの人間として深くつき合おうとした人であったことは確かです。その証拠に、彼女はかつて出会った人たちのことを実によく覚えておられました。

この点について、奥平さんの「もてなし好き」に言及しないわけにはいかないでしょう。自分のことはさておいて、いつもみんな(その時々々の友たち)のために、あれこれと心を配られるのでした。それは時に些か閉口せざるを得ない程のものでもありましたが、実に多くの人が彼女のその深い恩誼に与ったのでした。その最たるものが私ども「テコア聖書集会」の会員たちでしょう。彼女はこの小さなキリスト教の集りの長老として、常に会の中心のかつ世話役的存在でした。私どもが彼女からどれ程の霊肉ともなる「もてなし」に与ったか、とても言葉にはなりません。序でながら、奥平さんの「もてなし」の対象・領域は実に広く、多くのキリスト教伝道、平和運動、市民活動などが含まれていました。

以上のような意味で、奥平さんは文字通り「よく」生きた方であったと存じます。

しかし奥平富士子の「よく生きる」は、これだけのことではありませんでした。もっと深刻、重大な一面が

ありました。それは全く個人的、心霊的で、奥平さんの靈魂の秘密に属すること、彼女のキリスト信仰そのもののことです。彼女の一生はキリスト信仰に貫かれていました。

実は、奥平さんは若い日にあるカルト的キリスト教に入信して、そのマインド・コントロールに心身ともに疲弊し、非常に苦しみました。それは「心的外傷後ストレス障害(P.T.S.D.)」と言っている程のものでした。私は、彼女のそれからの脱出期に彼女と出会ったのです。六十一年か二年前のことになります。以来私どもは共に手を携えて、そのようなキリスト教を勉強し、それを批判し、それと戦ってきました。その意味で、私どもは互いに学友であり盟友であり戦友でありました。六十年の同士を失って、私どもの悲しみと寂しさは尽きません。

奥平さんは、生涯、とくに教職を退かれてからは一層に、このカルト的、戒律的キリスト教を脱して、福音的キリスト教を一途に追求し、それを信じて生きる人生をしっかりと生き続けられたのでした。その姿勢は一種独特、極めて個人的で自律的求道性に貫かれていました。その中で、彼女の独善的とも見える頑なさ、しんならつな皮肉を交えた鋭い批評、ひよつと口に出るユーモラスな発言などは、人生最重大事に心をうばわれ没頭する人間の、時に見せる愉快なパフォーマンスとして、私どもみなの上に残る懐かしい思い出です。

以上申し述べましたように、奥平さんは「よく生きられた」、そしてそれゆえにこそ「よく死なれた」。しかし、彼女の場合、ここでもそれだけのことではありません。まだ、その先があるからです。彼女の信じるキリストの福音(喜ばしいおとずれ)は、「キリストは復活であり、命である」(ヨハネ11・25)と宣言し、「福音を聞いて信じる者は死から永遠の命へ移っている」(ヨハネ5・24)と告げ、「死は勝利にのみ込まれた」(一コリ15・54)と歌っています。死は決して終わりではなく、新しい命の出発なのであります。

この大いなる約束を信じて、奥平さんとも「また会う日まで、神、皆様とともにいまし給うように」(讚美歌四〇五)祈って、式辞といたします。